名古屋学院大学論集　人文・自然科学篇　第55巻　第1号　pp. 55–67

〔論文〕

W. M. ヴォーリズがみた植民地朝鮮*

神　山　美奈子

名古屋学院大学商学部

要　旨

1905年に滋賀県近江八幡市に来たW. M. ヴォーリズ（William Merrell Vories, 一柳米来留（ひとつやなぎめれる））は，日本で建築事業と宣教事業に携わった。彼は，朝鮮半島にも146の建築作品を残していることが知られているが，それは日本が朝鮮半島を植民地支配している時期の作品であった。本論文は，ヴォーリズが植民地朝鮮をどのように認識していたのかについて残された史料と朝鮮人の弟子，姜沇（カンユン）との関係から究明する。さらに，ヴォーリズがみた植民地朝鮮理解の現代的意味を提示する。

キーワード：ヴォーリズ，朝鮮，建築，キリスト教，植民地

The Japanese colonization of Korea through the eyes of William Merrell Vories

Minako KAMIYAMA

Faculty of Commerce
Nagoya Gakuin University

＊本研究論文は，ヴォーリズ学園・学園史編纂室の依頼によりはじまり，一粒社ヴォーリズ建築事務所の芹野与幸氏，公益財団法人近江兄弟社（ヴォーリズ記念館）藪秀実氏，ヴォーリズ学園・学園史編纂委員委員長檜山秋彦氏のご協力により提供していただいた『The Omi Mustard Seed』をはじめ各史料に残されたヴォーリズの朝鮮関連記事を用いている。

発行日　2018年7月31日

1. はじめに

近江八幡YMCA会館，神戸女学院，関西学院，明治学院チャペルなど，キリスト教関係の建物だけではなく，病院や文化施設，銀行など多くの建築設計に携わったW. M. ヴォーリズ（William Merrell Vories, 一柳米来留）は, 1880年にアメリカのカンザス州レブンワースで誕生した。青年になってからコロラド州デンバーに移り，建築家を目指してコロラド大学へ入学。学内ではYMCAの活動に熱心で，22歳の時にカナダのトロントで開かれた「海外伝道学生奉仕団」（SVM）の大会に出席，そこで中国の宣教師夫人であるテイラー女史（Mrs. F. Howard Taylor）の講演に感銘を受け，一旦自らの建築家になるという夢を諦め海外伝道へと身を献げることとなった。大学を卒業したヴォーリズは，日本の滋賀県が英語教師を求めていることを知り，1905年2月2日，ニューヨーク国際YMCAの派遣により滋賀県立八幡商業学校の英語教師として近江八幡市にやってきた。学校ではバイブルクラスを開き，生徒たちにキリスト教を伝道するヴォーリズを危険視し，1907年に解雇される。同年4月，ヴォーリズは『THE OMI MUSTARD-SEED』という小冊子を創刊，主筆を務め，母国アメリカに向けた伝道活動の報告や彼の信条を英語で発信し続けた。英語教師を解雇されたヴォーリズは，アメリカで学んだ建築の技術を生かして本格的に建築事業を開始し，近江八幡市にあるYMCA会館をはじめ，教会，学校，ホテル，郵便局，商業施設，個人の邸宅などおよそ1600にもなる建築物の設計を手掛けた。そのうち国外における作品が193あるが，朝鮮半島における作品が146にも及んでいる[1)]。1912年には『湖畔の声』を創刊，こちらは日本語による報告や信仰の証が綴られている。個人的には，1919年に神戸女学院出身の華族である一柳満喜子と結婚するが，彼らの結婚式はヴォーリズが設計した明治学院のチャペルで挙行された。翌20年, ヴォーリズはメンソレータム（現メンターム）の開発者であるA. A. ハイド（Albert Alexander Hyde）と親交を結び，日本にメンソレータムの代理店を置く。一方，満喜子は三歳児教育の重要性を主張し保育所「プレイグラウンド」を設立，この施設が「清友園幼稚園」として1922年に正式に認可され, 現在のヴォーリズ学園（幼稚園, 小学校, 中学校，高等学校）の礎となった。

朝鮮半島とヴォーリズとの関係については，これまで主に建築物を通して研究がなされてきた[2)]。朝鮮半島でヴォーリズが手掛けた建築作品は前述のとおり146件，その多くがやはり教会，キリスト

1） 山形正昭「東アジアに広がるヴォーリズ建築」，尹一柱，山形正昭等『東アジアの近代建築』，村松貞次郎先生退官記念会，1985年，p. 1：山形の資料によると，ソウルが最も多く84，続いて釜山10，仁川8，平壌8，大邱4などと報告されている。同書p. 12. の地図。

2） 例えば, 鄭昶源「ヴォーリズ（W. M. Vories）の韓国での活動について：ヴォーリズの韓国訪問を中心に（2002年度大会（北陸）学術講演梗概集）」,『学術講演梗概集F-2，建築歴史・意匠』，一般社団法人日本建築学会，2002年6月，pp. 369-370. ：鄭昶源「W. M. ヴォーリズ（W. M. Vories）の韓国における建築活動に関する研究」,『日本建築学会計画系論文集（589）』，一般社団法人日本建築学会，2005年3月，pp. 207-211. ：鄭昶源，山形政昭「東アジアにおけるヴォーリズ（W. M. Vories）の建築活動に関する研究：その1　韓国（朝鮮半島）に計画された現存図面の整理・分析を中心に」,『日本建築学会計画系論文集（611）』，一般社団法人日本建築学会，2007年1月，pp. 195-201. ：鄭昶源「ヴォーリズ（W. M. Vories）が韓国で手がけた住宅設計に関する研究」,『デザイン理論56』，意匠学会，2011年5月，pp. 92-93. を参照。

教学校，病院，宣教師住宅であった[3]。これまでのヴォーリズと朝鮮半島との関係を扱う研究は，その建築物に関するテーマを中心に行われてきたが，本研究論文ではヴォーリズと朝鮮半島との関係を整理しながら，拙論「韓国におけるヴォーリズの働き」(『関西学院史紀要』，第12号，2006年）において課題として挙げていた，来朝「宣教師たちとの関わりを持ったヴォーリズは，当時の日韓関係をどのようにみていたのだろうか」，そして彼が「伝道の対象として朝鮮半島をいかに捉えていたのか，また信仰の共同体である教会が激しく日本に抵抗した際に，朝鮮半島にいた宣教師たちとどのような話しがなされたのか」，さらには「日本の支配下における朝鮮半島の平和をいかに考えていたのか」について究明したい。これにより朝鮮に建てられたヴォーリズ設計の建物のみならず，その背後にあるヴォーリズの思想や信条の一端を垣間見ることができるだろう。

2. 朝鮮半島との出逢いから3.1独立運動まで―1908 ～ 1919年

まず，ヴォーリズがはじめて朝鮮を訪問した1908年前後の日韓関係を整理しておきたい。

1894年に日清戦争が，1904年には日露戦争が勃発し，この戦争を経ながら日本と朝鮮は支配と被支配の関係を強めていった。1895年には朝鮮最後の王高宗の妻・明成皇后が日本により殺害されたことで朝鮮人の日本に対する反感が大きくなる中，1904年に第一次日韓協約が，1905年には第二次日韓協約が締結され，朝鮮の外交権は日本に剥奪された。その後，統監府に関する法整備と設置に関する勅令が発せられ，1906年に統監府が開庁するとともに義兵弾圧及び大韓帝国の軍隊解散，警察権や司法権等が剥奪されるなど，1910年の日本による韓国併合に向け植民地化政策が着々と進められていった。ヴォーリズの来朝はまさにこのような時期であった。それ以降，1945年まで朝鮮総督府の支配下で外交権，司法権はもとより国民の日常生活におけるあらゆる権利を日本が奪ったことは言うまでもない。そして，日本のキリスト教界はこの植民地支配を後押しする形で伝道活動を進めていったこともよく知られている。

鄭昶源によると，ヴォーリズは朝鮮半島を計17回訪問している[4]。はじめて朝鮮半島を訪れたのは，1908年であったと自身の文章で明らかにしているが[5]，はじめて訪れた朝鮮半島について，男性たちは品格を大切にし，真っ白い民族衣装を羽織った人々の姿を見て「天国に来た」[6] かのような印象をもったと述べている。しかし，その印象はすぐに掻き消され，建築家であるヴォーリズらしく朝鮮における建造物がアリゾナ州の先住民のものより若干劣っていると表現している。一方，朝鮮半島伝統の土で覆われた床下暖房に関しては興味を示し，台所の釜の火によって流れる温かい空気が床下を沿って部屋全体を暖めることについて，賢明で経済的な効果があると書き記している[7]。また，1908

3） これについては，拙論「韓国におけるヴォーリズの働き」，『関西学院史紀要』，第12号，2006年，p189–207. を参照されたい。

4） 鄭昶源『韓国ミッション建築の歴史的研究』，東京大学博士学位論文（工学），2004年，p. 256.

5） William Merrell Vories「Chosen Revisited」，『THE OMI MUSTARD-SEED』，1917年4月，p. 10.

6） William Merrell Vories，同書，p. 10.

7） William Merrell Vories，同書，p. 10.

年8月にYMCAの機関紙『The Pioneer』に「Opportunities in Korea」と題された次のようなヴォーリズの記事が載せられている。

> 最近の旅行により日本には朝鮮に対する大きな責任があると感じた。日本にとって，朝鮮の再生を試みることは小さな問題ではない。しかし，国内の経済的な負担が大きい今，それを引き受けることは大変難しいことだ。この事実から見ると，日本が今朝鮮のために尽くしていると世界は考えていない，日本は利己的であると思うだろう[8)]。

また，自叙伝『失敗者の自叙伝』には「日本の第一印象」を記しているが，その中で日本の風習と朝鮮や中国の風習とを比較しながらに朝鮮について触れている。

> 昔の朝鮮の貴族は，たばこをのむのに，長さ三尺もある，あのやっかいなきせるを用いたものだが，日本婦人の着物は，一般社会的に，これとはなはだ似たところがある。朝鮮のきせるは，これを見れば，必ず主人のために火をつける役めをする召使のいることが察せられる。同様に，日本婦人の着物も，いろいろの重ね着や帯紐の類を整えて，正式に着用しょうとすると，補助者のいることが明らかであって，こんな服装をしていては，活動的な仕事ができないということは，すぐにわかるはずである[9)]。

さらに，この「日本の第一印象」の結論は次のように締められている。

> 私は日本にきて，すでに四十八年めになるが，いわゆる「東洋的心理」なるものに，まだお目にかかったことがない。そのような人種的な特性は，元来存在しないのであって，ただ古い習慣や環境や地方的な指導者の感化や宗教的信仰などに基づく表面上の相違点があるだけだと思う。
>
> どの国，どの社会を問わず，そこには堕落した者もいれば，聖者に近い者もいる。どの人間にとっても，永遠の父なる神の，完全な子となる可能性が与えられている反面には，神から授けられた自由意思を乱用して，光よりも暗きを選び，実を結ばずに，しぼんでしまう春の花のように，永遠の滅びの道に走る可能性も，多分に存するのである[10)]。

真っ白の韓服姿の朝鮮人をみて「天国に来た」かのように朝鮮についてその印象を残したが，その後ヴォーリズはどのように朝鮮を捉えていったのだろうか。1919年3月1日を皮切りに全国に広がった3・1独立運動直後の4月，ヴォーリズは「More Trouble in Korea」という文章を記した。その内

8） William Merrell Vories「Opportunities in Korea」,『開拓者』, YMCA，1908年8月，p. 4.

9） 一柳米来留『失敗者の自叙伝』，財団法人近江兄弟社・湖声社，2014年第三版第三刷（1970年初版），p. 99.

10）一柳米来留，同書，p. 104.

容は，結局のところ日本と朝鮮の「相互理解と相互受容」[11]の必要性を説き，互いの姿勢について「最も残念なことは，日本政府や日本のキリスト教運動に対する在朝外国人の態度，また在朝宣教師と信者に対する日本政府の態度，さらに日本と朝鮮両国民の互いに対する態度」[12] であることを語っている。つまり，3•1独立運動がはじまるまでの日本の朝鮮支配に乱暴な部分があることを認めながらも，朝鮮のキリスト者が独立運動に関わっていることを遺憾に思う様子がうかがえる。また，この独立運動の背景に関して次のように記している。

宗教的団体の代表が政治活動に参加することが日本政府に不安を与えている。そのことは，日本政府が社会主義や天皇を中心とした愛国主義を好まない運動に過度に敏感になっているためだ。

キリスト教が完全に理解されるならば，民主主義に至るという事実を否定することはできない。しかし，キリスト教の真の精神がわからない人々にとっては，民主主義とボルシェビズムを区別することは難しい。

また，一時的に荒廃した国においては，大変な者が政治的援助を得るために，あるいは期待できそうな宗教的，経済的な運動に参加することもよくある。朝鮮には，最近の暴動を起こしたこのような「キリスト者」を名乗る者たちがいるのかも知れないので，問題はキリスト者が起こしているという報道がなされるのである。（略）

最も残念なことは，日本政府や日本のキリスト教運動に対する在朝外国人の態度，また在朝宣教師と信者に対する日本政府の態度，さらに日本と朝鮮両国民の互いに対する態度である。この問題を解決させるのは相互理解と相互受容である。私たち両国の宣教師は，良い関係を築くリーダーになるべきである。これまで私たちは，その責任を果たせずにいる[13]。

続けて，同年7月には次のような記事を載せた。

まず，日本の朝鮮総督府のやり方が決してうまくいっていなかったことを語らねばならないだろう。でなければ，10年間の占領の後，ここまで反日感情が噴出することはなかったはずだ。（略）

この暴動は両者にとって良い結果を生み出すかもしれない。なぜならば，（日本の）下級役人たちの悪党ぶりを明らかにするからである。彼らが軽率な行動をとっていることを上級の役人たちが気づいたためである。

朝鮮には三つの派があるようだ。一つ目は朝鮮における日本の政策に何らの欠陥も見出さず少数の朝鮮の政治的陰謀や自己中心的な野望に批判を向ける派，二つ目は日本の管理や日本国民に反感を持っている派，三つ目はすべての出来事を平等に評価し希望的解決を見出そうとす

11）William Merrell Vories「More Trouble in Korea」，『The Omi-Mustard Seed』，1919年4月，pp. 16–17.

12）William Merrell Vories，同書，pp. 16–17.

13）William Merrell Vories，同書，pp. 16–17.

る派である。この最後のグループに朝鮮人も日本人も宣教師も，キリスト者を見出すことだろう。前回4月号で述べたように，残念なことに，私たちの兄弟だと名乗る人たちの中には党派間の争い事から離れられないでいる。しかし，嬉しいことに，報道で聞くよりもそのグループが小さかったことだ。（略）

最初に日本が朝鮮を併合した状態がどうであれ，現在それは事実である。一部の朝鮮人にとってはこの状態が発展につながっているかのように見えた。ロシアや中国やドイツが安定した政府を確立することはできなかった弱小国朝鮮に侵入することによって日本に近づこうとしたため，日本は朝鮮に侵入した。（略）

併合が行われ，日本はこれまでになかったような細部にわたる管理をはじめた。朝鮮を旅する者の目を引く物質的な発展よりも，さらに大きな発展への期待をする多くの人がいた。しかし，日本には植民地統治の経験，富，有能な人材，道徳的な目的がなかった。そして自国においても，他国においても軍事制度に没頭するあまり不利になった[14)]。

ヴォーリズは，このようにあくまでもキリスト教宣教の重要性を優先し，政治的状況についてはどっちつかずの発言が多い。互いの努力により信頼を取り戻し，それによってキリスト教宣教もスムーズに行われるはずであるとの見解をみせている。

この1919年の朝鮮出張の際には，ソウル，公州，海州，平壌，仁川，宣川などを訪れ13件の設計依頼を受けている[15)]。これについて，韓国におけるヴォーリズ研究者である金眞一（キムジニル）は，「ヴォーリズは，朝鮮民族の独立運動に大きな関心を持ったことがわかる。その時，彼に設計依頼をした学校は偶然にも各地域における独立万歳の拠点であった」と，ヴォーリズが朝鮮で起きた独立万歳運動に関心を持たずにはおられなかった立場であったと推測している。特に，弟子である姜沇（カンユン）が卒業した公州の永明学校は，ヴォーリズと親交を持つウィリアムス（Frank C. Williams）が設立したキリスト教学校で，まさにこのウィリアムスがヴォーリズに姜を紹介した。その経緯について，ヴォーリズは『失敗者の自叙伝』で次のように記している。

六月二十九日には，主としてデンバー大学およびデンバー在住のコロラド大学学生から成る学生宣教義勇軍の集会が催された。この会合に出席した者の中から，後日外国伝道に重きをなしたものがたくさん出た。その中の一人について，その日の日記に『彼は必ず朝鮮でたいした事業を成し遂げるであろう』と記入してある。この予言的中した。彼はフランク・シー・ウィリアムスFrank C. Williamsと言い，メソジストの宣教会に尽し，彼が朝鮮で興した教育事業は大成功であった。彼は第二次世界戦争で朝鮮を追われ日本へきたが，ここでも農業教育という重要な分野において新機軸を作った。彼は朝鮮にいた時代に，彼の学校の卒業生の中からすぐ

14）William Merrell Vories「The Korean Crisis」，『The Omi-Mustard Seed』，1919年7月，pp. 94–96.

15）金眞一「우리 나라에 近代西洋建築을 導入한 Vories와 姜沇에 관한 考察」，『journal of the Research Institute of Industrial Science』，Vol. 32，Hanyang University，1990年，p. 153.

れた一青年を私たちのところへ送ってきた。この青年は姜沇君と言い，二十年の間私たちの建築部の重要なメンバーとして働き，後には京城出張所の主任となった。戦争のため朝鮮での事業を放棄しなければならなくなったとき，兄弟社はその全事業を姜君に寄贈した。彼は戦争のため，幾度も災禍に会いながらも，困難を克服しつつ，いまも都合よくこれを経営していてくれる[16)]。

3. 3.1独立運動後―1920 ～ 1930年代

翌年の1920年3月には4度目の訪朝について次のように書いている。

朝鮮の状況について，つまり政治的なことを述べると，すでに混乱した状態をさらに複雑化しないために注意深く触れなければならない。5月に私たちが見たことは今もそのままだが，成長と変化の傾向が目立つ。

最も大きな問題は「疑心」である。日本の管理者に信用を失った朝鮮人は，その信用を取り戻すことはなかなかできない。この原因は，彼ら朝鮮人の疑心が3割ならば，日本の下級役人の責任が7割を占めるだろう。よく日本人は朝鮮人を疑う。具体的には，朝鮮人の素直さと能力である。しかし，これは朝鮮人の代表者の存在を日本人が知らないからである。また，正義ある改革を実践する責任を感じている日本の権威者たちは使命を感じ努力をしている。しかし，真の解決が期待されるまでに，まず警察や下級役人たちを改革しなければならない。これらの人々が朝鮮の一般の人々と接しているからである。実際に，改善された点もある。それを見ようとしている人々には明らかである。反対にそうではなく残念な状態も残っている。それは，悪く見ようとしている人たちのデータとなる。状態を改善させる課題が巨大だ。それをしている人々には経験がなく不利な立場である。最も大きな障害物こそ人間社会によくある相互疑心である[17)]。

少し時間を空けて，1927年には朝鮮の状況について，日本の支配がはじまってから良い点とそうではない点とに分けて説明してきたが，一貫して日本の統治が朝鮮の発展につながっていることを次のように述べている。

朝鮮では日本の指導を中心とした発展が最も印象深い。それは，何年かを空けて訪朝する者にとっての印象である。20年前には何もなく，二輪車も通ることができない道，ほとんどが歩くための道であり状態も悪い。主な道がこの歩道しかない。それに対して，日本が現れてからできた新しい道があちらこちらにある。高速道路が朝鮮においては造りやすかった。そのため，

16）一柳米来留『失敗者の自叙伝』，財団法人近江兄弟社•湖声社，2014年第三版第三刷（1970年初版），p. 206.

17）William Merrell Vories「Korea The Fourth Time」，『The Omi-Mustard Seed』，1920年3月，pp. 260–261.

通り，下水道，水道管，それ以外の多くの改善が大小の町において，今は日本よりもよくなされている。

最も上の政府の役人には他の役人よりもキリスト者が多い。それは，明らかにキリスト教が一般的である国には相応しい。なぜならば，どんな町に行っても教会が目立つ存在であり，それは日本における仏教の寺と比較できるだろう[18]。

1936年8月に掲載された「Korean Again」には，朝鮮半島を何度訪れたかわからないほど度々訪れていることが記されている[19]が，それは1932年からソウルにある梨花女子大学の学舎建設など朝鮮における建築事業のため1930年以降に何度も朝鮮を訪問したからであろう。現在も美しい姿でキャンパス内に建っている梨花女子大学本館は1935年3月に完工，その他，音楽館や体育館とともに同年5月31日に奉献式が執り行われている。同記事には，ヴォーリズが梨花女子大学創立50周年に参列したことが記録され，梨花女子大学が今や世界のどこよりも素晴らしい教育機関となったと自負している様子がうかがえる[20]。

また，ヴォーリズの愛弟子である吉田悦蔵[21]は，ヴォーリズが梨花女子大学の設計に取り掛かった1930年代，『湖畔の声』に朝鮮の釜山から京城へと訪問した際の印象を次のように記している。

外部は堂々，内部は全く粗末で驚く。これは支那朝鮮の通例らしい。日本人もビルディングの内部を小ギタナクして居るが，朝鮮や支那はまだまだ，進入がかゝつて居るのでウンザリした。（略）朝鮮ホテルの四階の窓より，加藤清正や小早川小西の豪雄連の見上げたであろう，虎の住みし北漢山，王宮，倭城台，南大門が見える。そして白衣の朝鮮サラミの往還する姿，可愛らしい桃色，紅色の上衣に，黒いスカーツの小學生が，點々と色どりして居る町を見る。（略）それから昌徳宮後の秘苑の特別拝観をする。千年以上の舊い王宮の跡で，魚水門だの宙今樓だの，齊月光風観だのとある扁額を掲げた，朝鮮式の美しい門，樓閣等を見て感心する[22]。

18）William Merrell Vories「Another Glimpse of Korea」,『The Omi-Mustard Seed』, 1927年6月，pp. 29–30.

19）William Merrell Vories「Korean Again」,『THE OMI MUSTARD-SEED』, 1936年8月，p. 51.

20）William Merrell Vories，同書，p. 52.

21）1905年にヴォーリズが滋賀県県立八幡商業学校で英語教師を始めた時の生徒の一人で，ヴォーリズに感化され洗礼を受けた。恩師ヴォーリズが近江八幡に留まって「神の国」建設に尽くそうとする信仰心と熱意に打たれ，ヴォーリズと共に活動をはじめた。1910年，帰米したヴォーリズとアメリカ人建築家レスター・チェーピンと共に3人で「ヴォーリズ合名会社」を設立。さらに翌年には「近江基督教伝道団（近江ミッション）」が結成される。吉田はその中核とし働きに加わり，近江ミッションを発展させていった。1913年（大正2年）には外遊先のアメリカで，YMCAや海外伝道学生奉仕団の熱心な支援者であり「メンソレータム」（現・近江兄弟社メンターム）の発明者A・A・ハイドと不思議な導きにより面会し，病気療養のため帰国していたヴォーリズとハイドの出会いのきっかけを作っている。吉田は，その後の「近江兄弟社」設立に大きく貢献し，あらゆる面でヴォーリズの片腕となった。：http://vories.com/hitobito/02.phpを参照。

22）吉田悦蔵「支那日記」,『湖畔の声』, 4月号，1931年，p. 50.

満州國は，朝鮮よりは統治が仕安く，日本としても，韓國以来，いろいろ迷惑を蒙つた，白衣國よりの歩みよりは，もっと，もっと朗かに，満蒙の天地と，協力作業が出来ると私は確信します[23]。

このように，吉田はヴォーリズと仕事を共にする建築家として朝鮮の建築物を冷静に評価する一方，日本の朝鮮統治に関しては，植民地として支配することを前提に満州と比較し朝鮮統治の難しさについて感じたところを述べている。

また，ヴォーリズには朝鮮人の弟子がいた。その中でも代表的な人物が姜沇（カンユン）と林徳洙（イムドクジュ）である[24]。林は1920年から29年までヴォーリズ建築事務所に務めたが，その後のことは詳しく知られていない[25]。姜は，同じく1920年に同事務所に入り，「ヴォーリズの信頼を得た後，1938年に開設されたヴォーリズ建築事務所のソウル出張所の所長となった。」[26]この二人の朝鮮人の弟子たちが，少なからずヴォーリズに当時の植民地朝鮮についての印象を与えたと思われるが，この二人との関係に関しては後述することとする。

4. ヴォーリズがみた植民地朝鮮の現代的意味

以上，ヴォーリズが植民地朝鮮をどのようにみていたかについて論じたが，ここで一つ手掛かりとなるのが彼の日本観であろう。ヴォーリズは1919年に明治の貴族院議員であった子爵一柳末徳の三女，一柳満喜子と結婚した。満喜子との結婚が挙行された当時，ヴォーリズは自ら「人間は皇帝や組織よりも全能の神に深い信頼を寄せるべきであり，宗教組織は国家の奴隷としては存在しない」[27]と記していることからもわかる通り，満喜子との結婚以前には国家と皇帝，宗教と皇帝が確実に分離されていた。ヴォーリズがはじめて朝鮮を訪問した1908年の「一般的日本人」は，隣国朝鮮を中国（清）から解放させ保護するという名目とは裏腹に，植民地として日本の支配下に置き，同化させることが朝鮮にとっても最良の策であると信じていた[28]。しかし，実際に朝鮮半島では日本の圧政に対する疲弊と反発が起き，1919年3月1日を皮切りに大規模な反日独立運動が展開されたのである。それはまさに，ヴォーリズと満喜子が結婚した年であった。

23）吉田悦蔵「満州を楽観する」，『湖畔の声』，10月号，1933年，pp. 2–3.

24）その他にも，馬鐘濡（マジョンユ），崔永俊（チェヨンジュン），金韓星（キムハンソン）などがいた。1929年に『湖畔の声』に掲載された「満鮮北支旅行記（二）」において，ヴォーリズは林の結婚と訪問を報告し，また馬についてもこの旅行の際に共に会食したことを記している。：W. M. ヴォーリズ「満鮮北支旅行記（二）」，『湖畔の声』，1月号，1929年，p. 29.

25）尹一柱「1910～1930年代　2人의 外人建築家에대하여」，『大韓建築学會誌』，29巻124號，1985年6月，p. 18.

26）鄭昶源「ヴォーリズ（W. M. Vories）が韓国で手がけた住宅設計に関する研究」，『デザイン理論56』，意匠学会，2011年5月，p. 93.

27）William Merrell Vories「The Korean Crisis」，『The Omi-Mustard Seed』，1919年7月，p. 100.

28）著者の拙論「武断統治期（1910–1919）における女性キリスト者の朝鮮理解―日本キリスト教婦人矯風会とYWCAを中心に―」，『神學研究』，関西学院大学神学部，63号，2016年，pp. 15–28を参照。

ヴォーリズの思想研究の第一人者である奥村直彦は，ヴォーリズの天皇観が「当時の一般日本人と変わるところはなかった」とし,「終戦の決断を下した天皇に人間的勇気を見て感激したのであって，それ以外の政治的思惑はまったくなかったと言ってよい」[29]，またヴォーリズが「親天皇，親皇室の故に咎められるべきではない」と言及しているが，この奥村の考察は「当時の一般日本人」だけではなく「現在の一般日本人」が抱いている朝鮮理解につながってはいないだろうか。つまり，この限界は，日本とヴォーリズの祖国であるアメリカを背景に考えられた日本側（加害者側）において有りうる見解であり，隣国朝鮮や中国（被害者側）からの視点が欠落している点にあると言える。

この点について，先述した朝鮮人の弟子，姜沇について詳しく述べることとする。彼は，1920年に来日する直前の1919年に公州にある永明学校の3.1独立運動の主導者の一人として参与し，柳寛順（ユグァンスン）の兄，柳俊錫（ユジュンソク）などと共に刑6か月の宣告を受けた。柳寛順（ユグァンスン）は梨花学堂に進学し，日本の植民地支配に対する朝鮮の独立運動家として大きく貢献し，ソウルの西大門刑務所で拷問を受けた末に最期を遂げた人物として韓国で知らない人はいない。このような背景を持った姜は，梨花女子大学の石造講堂や韓国神学大学本館など朝鮮に大規模な作品を残しているが，彼の作品の特徴の一つとしていくつかの建築物に「太極模様」[30] を描いていることが挙げられる。これについて金は，「恐怖の時代に，さらには日本の地で，どのような心情で設計図面に太極模様を描き，その建築の竣工を見守ったのであろうか」と，太極模様に込められた姜の抗日的な行動について一定の評価を示した。さらに金は，吉田悦蔵の息子，希夫から次のような書簡を受け取ったことを記している。

> 姜沇氏家族について時に思い起こしてみました。姜沇氏は私を大変可愛がってくれました，金先生にお話ししました通り，「フランス革命をよく読んでみてください。その本を読んで涙を流さない人はいないと思います」と私に言われたことを今でも忘れません。実際に，私はあの方の言葉通りその本を読んで涙を流しました。姜沇氏は，真の愛国者でありましたので，常に同胞を思い，鬱憤が溜まっていたと記憶しています。そして，彼はここでも日本を嫌う思いでいっぱいでした。しかし，常に高邁な精神をもち，毅然とした態度であったことを覚えています。夫人も常に白い韓服を着ておられました。お二人の日本での生活は人並外れたご苦労が多かったでしょうが，時々私の家に寄ってくださいました。……[31]

韓国におけるヴォーリズと姜沇の関係に関する研究は，このように姜沇の独立運動への参与や太極

29）奥村直彦『ヴォーリズ評伝―日本で隣人愛を実践したアメリカ人―』，p. 260.

30）鐘路にあった泰和女子館や梨花女専の礼拝堂の椅子に「太極模様」が描かれていた。：金眞一「우리 나라에 近代西洋建築을 導入한 Vories와 姜沇에 관한 考察」,『journal of the Research Institute of Industrial Science』，Vol. 32，Hanyang University，1990年，pp. 153-4.

31）金眞一「우리 나라에 近代西洋建築을 導入한 Vories와 姜沇에 관한 考察」,『journal of the Research Institute of Industrial Science』，Vol. 32，Hanyang University，1990年，p. 156.：手紙の原文は日本語であろうが，金が原文をハングルに訳したもの論文に掲載し，今回は金のハングル訳を再度日本語に訳すほか方法がなかった。

模様を描いたことから彼の愛国心に一つの焦点が当てられている。しかし，姜のこのような思想的背景や行動については，先に論じた通り，ヴォーリズが特に関心を示した様子はない。そのことから，日本におけるヴォーリズ研究と韓国におけるそれとの間には，特に思想研究において，観点の違いが明確に存在していることがわかる。

1940年，ヴォーリズは滋賀県の八幡神社の氏子となる「立言式」を挙行することにより，翌年正式に日本国籍を得る。ヴォーリズが日本に帰化することとなった背景には，「日本を愛するから」[32]という理由と同時に「明治天皇の他国の君主には見られない御稜威と御製に抱いた敬愛の念」[33]が含まれていた。朝鮮の地で，このヴォーリズの決断を弟子の姜はどのように受け止めただろうか。また，これまでに植民地朝鮮にいる姜の観点からヴォーリズを研究することがあっただろうか。

また，妻・満喜子は，ヴォーリズの天皇観について彼の著書『失敗者の自叙伝』の序文で次のように述べている。

> 大東亜戦争は日本の敗北に終わり，マッカーサー元帥は，天皇を戦犯第一人者と考え，日本へ侵入してきました。そのとき，米来留は，当時政権の裏にあって国を守るため生命をかけ，熱心に奔走された近衛公に，極秘の内に用いられ，単独マッカーサー元帥の横浜のキャンプに，差し向かい，天皇は，この戦争には責任のないこと，天皇ご自身は，自分を神とひとしいとは考えておられないことなど証明し，その結果，元帥の信頼を受け，これらを信じてもらい，天皇に対する敬意を，高くするご用を果たしました[34]。

このように天皇に対して強い敬愛の念を抱いていたヴォーリズは，1945年8月15日に行われた昭和天皇による「終戦の詔勅」を直接耳にして深い感銘を受けたという[35]。また，帰化の立言式でなされた彼の宣誓書には「日本帝国の国籍を與へられる上は日本帝国の臣民として皇室に對し奉り全身全霊を捧げ忠誠を盡し，日本の國體の精神を遵奉すべき事を茲に謹んで神明に奉誓候」[36]と記されている。奥村は，ヴォーリズの天皇観について「来日当初の生々しい天皇観からは隔絶した，神格化されたものとなっている」[37]としながら，帰化当時の様子について次のように述べている。

> 当時，日本国民になることは「天皇の赤子」となり，同時に国家神道との関係で神社の氏子

32）奥村直彦『ヴォーリズ評伝―日本で隣人愛を実践したアメリカ人―』，新宿書房，2005年，p. 223.

33）奥村直彦，同書，p. 223.

34）一柳米来留『失敗者の自叙伝』，財団法人近江兄弟社・湖声社，2014年第三版第三刷（1970年初版），p. 4.

35）一柳米来留，同書，pp. 251–252.：奥村によると，1945年8月15日直後に書かれたヴォーリズの詩「天皇陛下万歳」について「開戦の責任は不問とし，もともと天皇は『平和愛好者』であって，国民を救うために勇気ある終戦の決断をされたのだとする，いわゆる『保守的天皇観』の典型をみることができる」としている。同書，p. 259.

36）1940年8月20日（火），八幡神社において挙行された立言式の際に読まれた宣誓書

37）奥村直彦『ヴォーリズ評伝―日本で隣人愛を実践したアメリカ人―』，p. 255.

となることであった。だからヴォーリズが帰化に際して，君主として，また神道の斎主としての天皇を意識せざるを得なかったことは明らかである[38]。

彼は三五年に及ぶ滞在の末に日本に帰化した一柳米来留という日本人であり，その意味で，彼の天皇や皇室に対する敬愛の念は，当時の一般日本人と変わるところはなかったと言える[39]。

このことについて，北アリゾナ大学名誉教授であるWilliam H. Lyonは，論文「An American in Japan: William Merrell Vories, 1905–1964」においてヴォーリズの生涯や思想を扱いながら，ヴォーリズは，「実際にダグラス・マッカーサー将軍と連合軍最高司令部（SCAP）のスタッフ同様，ヒロヒト天皇に対してもほとんど崇拝的態度を示した」[40] とヴォーリズが天皇やマッカーサーはじめ連合軍最高司令部を崇拝対象とみなしていたと述べた。また，ヴォーリズにとって第二次世界大戦において日本が戦争をはじめた責任と無条件降伏へのアメリカのコミットメントは大きな意味を持たず，結局，ヴォーリズと政治は異質なもののようにみなされるが，天皇ヒロヒトとマッカーサー元帥の前では偽りの姿をみせていた，と批判的分析をした[41]。このことは，Lyonが指摘しているように，戦後ヴォーリズ夫妻は天皇家との交流を継続し，藍綬褒章や勲四等瑞褒章の受章につながった[42]。

ヴォーリズの願いは，日本においても朝鮮においても，世界のどこであってもキリストの福音が述べ伝えられ，「神の国」が建設されることであった。確かに，そこには純粋なキリスト教宣教の目的があったはずである。しかし，ヴォーリズの朝鮮理解を考察するとき，彼の限界として見え隠れする問題が挙げられる。それは，まさに加害者日本と被害者朝鮮という構図の理解が欠如していることであった。植民地支配の底に敷かれた人間存在の差別構造にまでは意識が届かなかった。

5. おわりに

奥村の言う通り，「一般日本人」として「親天皇・親皇室」であったヴォーリズを咎めることがここでの目的ではない。当時の日本のキリスト教界が日本の植民地政策に迎合し植民地支配することこそ真の「神の国」を実現することであると信じていたように，ヴォーリズもまたそうであったのだろう。ここで私たちに求められていることは，裁くことではない。むしろ私たち自らがこのことをどのように受け止め，どの視点から研究，考察するのか，そして日韓関係に関する自らの言動を問うていくことである。ヴォーリズが願った「神の国」は，加害者日本と被害者朝鮮を徹底的に突き合わせ，膿を出してこそ成就されるものであるからだ。ただし，日本の植民地支配のもとで被害を受け，苦しんだ隣国の人々にとって，戦争責任において天皇を擁護したヴォーリズに批判の目が向けられる必然

38）奥村直彦，同書，p. 254.

39）奥村直彦，同書，p. 270.

40）William H. Lyon「An American in Japan: William Merrell Vories, 1905–1964」，『同志社アメリカ研究』，第39号，同志社大学アメリカ研究所，2003年，p. 42.

41）William H. Lyon，同書，p. 44.

42）William H. Lyon，同書，p. 44.

性を私たちは無視できない。そして，ヴォーリズに関する思想研究が日本国内に限定されることなく，韓国の研究者を含む東アジア全体の思想研究が行われることによってヴォーリズの貢献及び私たちに残された課題がより明確に示されるであろう。この課題と真摯に向き合う時，真の「神の国」を再び語り始めることができるのではないだろうか。